

伊江親方日々記解説

伊江親方朝睦は、国王尚穆のもとで乾隆四七年（一七八二）～嘉慶七年（一八〇一）年まで三司官を勤めた人物で、唐名は尚天迪という。伊江朝睦の経歴は、伊江親方家の家譜亡失のためにわからないのだが、琉球科律の編纂等にも関わっており、また書の才能に優れていた。本日記は、伊江朝睦、つまり御三代伊江親方御用日々記をはじめとする、以下の七冊の日記からなる。

- ① 乾隆四拾九年甲辰并五拾貳年丁未 三代伊江親方御用日々記
- ② 嘉慶八年より拾貳年迄亥子丑寅卯御進物留
- ③ 嘉慶拾三年より拾四年辰巳 御三代伊江親方日々記
- ④ 嘉慶拾五年より拾六年迄午未 御三代伊江親方日々記
- ⑤ 嘉慶拾八年酉 御三代伊江親方日々記
- ⑥ 嘉慶拾九年より貳拾壹年迄戌亥子 御三代伊江親方日々記
- ⑦ 嘉慶貳拾年より同□分御病中日記并

乾隆六十年卯御四代伊江親方御先室御病中御看病日記

がそれである。しかし、これらは咸豊拾壹年（一八六一）十月に筆写されている事が、各冊の表紙に記されている。本来の記録者の朝睦の曾孫に当たる朝彬によって筆写されたものである。その筆写の時点で、すでに落冊虫入切廢があつたようで、表紙のみでなく、文中に虫入のため筆写できない等の記録がある。現在では、その以後の虫損もあり、修理はされているものの、読みづらい。が、その内容は多岐にわたるものである。その一例を各冊毎に解説してみる。

- ①は、乾隆四九年（一七八四）と乾隆五二年（一七八七）の二

年間、この日記の記録者である伊江朝睦が三司官として、政務を執っていた頃の日記、つまり御用日記である。その内容を見ると、三司官の職務の一端と、それに絡む国王や、同僚の三司官の動靜がわかる。例えば、乾隆四十九年三月の飢饉での米の使用をめぐる酒造の禁止や、飢饉で弱った芋につく害虫をはらう方策をめぐっての話し合いなど、三司官を代表とする表十五人とよばれる評定所の議決機能をもつ役人達と、国王（この時期は尚穆）との合意に至るまでのせめぎ合いの様子が細かく記されている。また、在番奉行を始め、薩摩からの役人の動靜や応接への気配りなどに関する内容が多く、薩摩役人とのつきあいが重要であつたことを示している。そして、これらの記録の間を埋めているのが、多くの船の出帆入港の記録である、中国へ向かうにしろ、薩摩へ向かうにしろ、船がつかなく外交経済の動向は、琉球にとっては、その政治を左右するものであつたからだろう。

ほかに、在番奉行として赴任してきた薩摩役人に、樺山助之丞（一七八六～一七八八）がいるが、彼は一六〇九年の琉球入時の大将であつた樺山権左衛門の末裔である。樺山家が尚寧の靈をまつつており、琉球赴任を契機に、尚寧の供養を円覚寺で行うことを希望している。しかし琉球側は、彼に円覚寺では私的な供養はできないと断わっている。

②は嘉慶八年（一八〇三）から十二年（一八〇七）までの五年間の進物留として記録されている。記録者の伊江朝睦は、この記録の時点では、すでに三司官を引退し、これ以後の記録は伊江家における隠居者としての朝睦の自分日記の様態となつている。御進物留とあるが、内容は特に進物贈答の記録のみにとどまらず、伊江家の交際範囲を知ることが出来て興味深い。特にその親族と

しての、勝連按司、上原按司、伊江按司、富盛親方、宜寿次親方、幸地親方、富盛祖母、嘉陽曾祖母、佐久真、前川、奥平、知念、知花等との、出産、婚姻、病氣見舞い、葬式等の冠婚葬祭をめぐる贈答、また門中での墓の管理、年中諸祭式の時の合力の様子などが記述されている。ほかに地頭地である伊江島との関係も密接で、島から祝儀に合わせて、塩豚などが贈られている。登場する贈答品は、饅頭やたすのような日常の食品類から、たばこ・扇子等の贈答用として準備されたもの、婚礼用に準備された織物などと多彩であり、当時の上級首里士族の生活の中での使用していた品を明らかにしてくれる内容である。

③は嘉慶十三年（一八〇八）から同十四年（一八〇九）までの日記である。これも隠居後の自分日記に当たる。但し、嘉慶十三年の正月から十二月までの日記の後に、嘉慶十三年八月から翌年五月迄の「嫡孫蒲戸勤方二付而諸事日記」が挿入され、その後にもまた十四年の日記が始まるという形になっている。この挿入部分の日記は、孫の蒲戸、後の伊江朝徑が、八月十一日に国王尚穆から「御側御遣」を仰せ付けられた日からの日記である。この蒲戸に対して、朝睦は、父親に匹敵するほど、教育や日常の躰等に心を配っている。また、一方蒲戸と国王の関係も密接で、首里城以外の崎山御殿や我謝御殿など国王の私的な時間にも呼ばれていることが多い。三司官等の高級官僚の嫡子達が、小赤頭等の職で元服前に出仕するのも、蒲戸のように公的な仕事を覚えるよりも、顔繋ぎの意味が大きかったのであろう。また、本来の日記の中では伊江家の祀る謝名奥間大親と、国頭奥間大親の祭祀についての門中での話合いの内容なども見える。その他、門中の祭祀に関わる女性親族の姿もかいま見える。ところで、三月五日には、かわ

いがっていた女孫のうしが病気でなくなっているが、この件は書き忍びがたいとして記録されていない。但し、別冊として、家内の誰かに記録させているが、残念ながらこの別冊は残っていない。

④は嘉慶十五年（一八一〇）より十六年（一八一）迄の自分日記であるが、しかし嘉慶十六年は三月からしかはじまらないように、一・二月は虫損のため筆写されていないことが記されている。また、嘉慶十五年は、本来の日記の後に、「別冊より抜」として、さらに別の十五年の記録が記されている。そのような違いはあるのだが、内容を見ると、前冊から続いている記録である。

国王の側遣を勤める蒲戸が元服を許され、「五色之差物入形付」他、様々な品を拝領している。またこの年は、麻疹がはやっており、首里の士族達はその難を凌ぐために、別荘や自分の地頭地へ家族とも移動したり、麻疹除けということで、滋養強壯のための食品が贈答されたりしている。他に、多大な借金を抱える親族のために、金を合力したりと、親族間の扶助意識の強さも伺い知れる。それは単に親族間にとどまらず、使用人へも広がる。自分の使用人だったものから、進貢船の五主役へ幹旋を頼まれると、その交渉をし、また使用人の冠婚葬祭にも細かく贈答品を送る等がそれである。

⑤は嘉慶十八年（一八一三）の自分日記である。④が一六年までの日記であったので、④と⑤の間の一年分が欠けていることになるのだが、表紙以外には、特に限定した注記はない。この欠けている一年の間に、朝睦の嫡子、前年の嘉慶十七年から、息子の伊江親方朝安は、年頭使者として薩摩へ旅役で出ており、家を長期に空けているのだが、その間に朝睦の妻が亡くなったことが、本冊の正月二十二日に百カ日の弔を行っていることからわかる。

朝安が帰ってくるまで、六月二十五日の様な書簡を、便船がある毎に送っていることが窺われる。そして、歸帆が間近になると、待ちわびる家族を慰め、歸帆の船の安全を祈るために、九月二十五日には親族一同が集まって、遊山をしている。待ちわびる家族とそれを扶助する親族の姿が見える様である。伊江親方朝安は、十月末には帰帆し、彼の買い戻った梅花の作花を飾ったり、泉池をすえたりなど、朝睦の喜びが日記に表われている。しかし、一方で首里の上流士族とはいえ、家政の財政状況は相当に厳しく、伊江家の地頭地である伊江島の地頭代はじめ役人へ、余計砂糖を繰回してもらおう交渉をし、それを親族へ回して、借錢の工面をしている。借錢返済は、最も早い方法は、砂糖を手に入れて薩摩で換金する方法であった。

⑥は嘉慶十九年（一八一四）から嘉慶二十一年（一八一六）迄の自分日記である。これも嘉慶二十年の自分日記の後に、嘉慶二十一年の正月から六月までは家中日記として記録されている。しかし次は閏六月日記へとつながっている、別日記からの挿入とは考え難い。その内容で得に興味深いのは、薩摩役人との交友関係が隠居後も続いていることである。嘉慶二十一年正月の平田帚部を招請しての夜咄、また六月八日の新奉行島津十太左衛門とその五男川久保十郎の養父頼みの件などがそれである。また、蒲戸の亡室百カ日の記録もある。この亡室とは、尚穆第三子義村王子尚周の次女真牛金のこと、嘉慶二十一年の八月二十一日に卒している。（向姓義村家家譜）それから三司官であった朝睦ならではの記録もある。嘉慶二十一年八月十六日の早魁に対しての雨乞いなど王府の措置が遅いことに不審を持ち、評定所主取を招いてその訳を聞いている。この雨乞いは、九月十一日に雨が降って

中止するのだが、自分の頼みであることは口外しないようにと念を押している。ほかに、これまでの冊に共通するのだが、首里の各寺の長老衆との碁会や花見など、また国王及び王妃等との深い交際なども随所にあり、興味深い。

⑦は、（一）嘉慶二十年（一八一五）と（二）乾隆六十年（一七九五）の日記であるが、今までのものと趣が変わる。（一）は朝睦の病中日記である、その記録は細かく、八月から十月までの三ヶ月間の病状の経過のみでなく、一日の食事の回数、大便の回数と状態、用いた薬の種類等が記録されている。ただし、咸豊十一年に筆写された時点での錯簡がある。また（二）は、時期が三十年ほど遡るが、朝睦が三司官在任中、息子の朝安（後の四代伊江親方）の先室、つまり各冊の日記中の「婦真鶴」ではない先室の真鶴の看病日記である。病中の嫁の生活、食事、薬方、それを囲む人々の様子が詳しく記録されている。さらに、真鶴自らでの実家への帰宅、その後の実家での看病に、見舞いに出かける夫の姿なども興味深い。どちらも医者が多く出てくるが、それぞれの配剤や養生法の違いなどが見られ、こまかい病状記録も含めて、近世琉球の文書記録には例がないのではなからうか。ぜひ医学関係の方に分析してもらいたい内容である。

日本の江戸時代は、武士のみでなく、商人達まで広く日記を書いた時代であるが、近世琉球では公的日記の存在は、評定所日記等に見られるように、文書の分類としても多いジャンルであるが、個人の生活を記した日記とすると非常に少ない。福地家文書の中の「日記」や八重山の「目差役被仰付候日記」のように、公的日記と自分日記が混ざった形のものなどはあるが、個人日記となると、「仲尾次政隆日記」やこの「伊江親方日々記」のように非常

に少ない。このように考えると、沖縄における本日記の価値の高さは言うまでもない。

さて、本日記は、すでに一九七〇年に『那覇市史資料編第1巻の2』として刊行されているが、その時点では編集の都合で抜粋された内容となっている。そこで、この度は影印と翻刻の両者を比べられるようにして、県史資料編として刊行したものである。

歴史・民俗・医学、女性史にと幅広く活用できる内容である。広く活用してほしい。

さて最後になるが、伊江親方をめぐる人々の親族関係をわかる範囲で、現わしてみた。冒頭で述べた様に伊江家（川平）は、家譜亡失のため、正確なことはわかり得ない。しかし、読むための参考にもなれば幸いである。

